

宇土城跡（西岡台） VI

—発掘調査・保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第24集

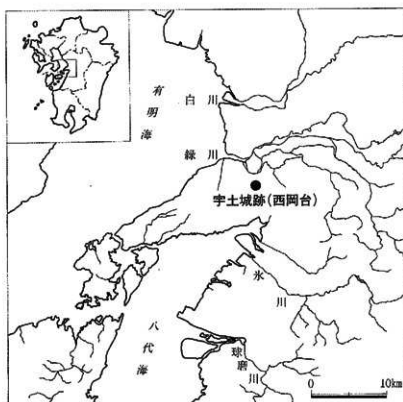
2003年3月

熊本県宇土市教育委員会

宇土城跡（西岡台） VI

—発掘調査・保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第24集



2003年3月

熊本県宇土市教育委員会

序 文

本書は、宇土市教育委員会が実施した宇土城跡（西岡台）の発掘調査ならびに保存整備工事の概要報告書です。

宇土城跡は、昭和54年3月に国指定史跡となり、同56年度に整備事業を開始しました。現在、第1ブロック（西岡神社北側地区）の整備を完了し、第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の調査と整備を続けています。

宇土城跡の主郭である千畳敷の発掘調査では、多数の掘立柱建物跡や欄列跡、門跡などを検出しました。さらに、千畳敷を囲む空堀跡が未完成であり、掘削単位（小間割）の跡が残されていたことや、石塔を用いた城破り跡を九州で初めて確認するなど、今後の中世城郭研究に影響を与える重要な成果が得られています。また、出土した土師器・瓦質土器・貿易陶磁器は、宇土城跡における生活の様子を窺い知ることができる貴重な資料といえるでしょう。

保存整備に関しては、発掘調査の成果を反映し、正しい歴史背景に基づいた整備を行うために、有識者で構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会を年3回程度開催しています。本委員会の指導や助言をうけて、平成13年度までに千畳敷の掘立柱建物跡の平面・立体表示や空堀跡の復元、城破りに用いられた石塔群の野外展示などの整備工事を行いました。

最後になりましたが、調査ならびに整備にあたってご指導・ご協力いただきました文化庁ならびに熊本県教育委員会、保存整備検討委員の先生方をはじめ、関係各位の皆様方に心より感謝申し上げます。

平成15年3月

宇土市教育委員会
教育長 坂 本 光 隆

例 言

1. 本書は国・県補助金を得て宇土市教育委員会が実施した、宇土城跡保存修理事業に伴う主郭（千畳敷）周辺の発掘調査ならびに保存整備工事の概要報告書である。
2. 調査地は熊本県宇土市神馬町宇千畳敷579・624・625・626-1に所在する。
3. 発掘調査は藤本賢仁が担当した。
4. 遺構実測図作成は松下修也・安藤正・山口陽子・平木君代・林和美・田中由美・藤本が行ない、一部を（株）ダイナプラン・（株）九州航空に委託した。
5. 遺構・遺物写真撮影は藤本が行い、空中写真撮影は（有）スカイサーベイ九州・（株）九州航空に委託した。
6. 遺構実測図の製図は、調上幸恵・平木・山口・藤本が行った。
7. 本書で用いたレベルは海抜絶対高、方位は座標北（座標第Ⅱ系、旧座標）である。
8. 保存整備工事は（株）グリーン工業・（株）山陽技術が実施し、設計・監理は（株）空間文化開発機構に委託した。
9. 本書の執筆・編集は藤本が行った。
10. 出土遺物・その他関連記録は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に收藏・保管している。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯と経過	1
第2節 調査の組織	2
第2章 調査の成果	3
第1節 調査の概要	3
第2節 検出遺構	4
第3節 出土遺物	11
第3章 ま と め	13
第1節 古墳時代の首長層館について	13
第2節 堅堀状遺構SD19について	14
第4章 保存整備工事	17
第1節 はじめに	17
第2節 平成13年度整備工事	19

挿図目次

第1図	宇土城跡縄張り図 (調査前：昭和49年測量) ……………	3	第7図	千疊敷及び周辺地区保存整備計画図……………	18
第2図	調査区遺構配置図……………	5	第8図	平成13年度整備工事施工図……………	23～24
第3図	SD01・SD18遺構図……………	7	第9図	千疊敷北側空堀周辺施工図(1)……………	25～26
第4図	SD01・SD19遺構図……………	10	第10図	千疊敷北側空堀周辺施工図(2)……………	27～28
第5図	首長居館の推定配置図……………	13	第11図	千疊敷南東側空堀周辺施工図(1)……………	29～30
第6図	SD19推定配置図(昭和49年測量図と合成) ……	15	第12図	千疊敷南東側空堀周辺施工図(2)……………	31～32

写真目次

写真1	調査区空中写真(北東より)……………	4	写真15	黒釉陶器……………	11
写真2	千疊敷北側空中写真(北より)……………	6	写真16	千疊敷周辺整備状況(南西より)……………	17
写真3	SD18踏跡出土状況(北より)……………	6	写真17	千疊敷北側工区整備前(東より)……………	19
写真4	SD18上層断面(北より)……………	6	写真18	遺構保護盛土(北西より)……………	19
写真5	I4次北・15次調査区(T1502・I503) 空中写真(北東より)……………	8	写真19	ラス張り付け状況(西より)……………	19
写真6	T1502カクラン溝に現れたSD19 北側壁断面(東より)……………	9	写真20	ソイルセメント吹き付け(東より)……………	19
写真7	T1503調査前状況(南より)……………	9	写真21	竣工(東より)……………	20
写真8	SD19検出状況(北より)……………	9	写真22	千疊敷地区野芝張り(北東より)……………	20
写真9	SD01検出状況(南より)……………	9	写真23	構列跡整備状況(南東より)……………	20
写真10	SD19調査状況(南より)……………	9	写真24	解説板設置状況(西より)……………	20
写真11	土師器……………	11	写真25	千疊敷南東側工区整備前(北より)……………	20
写真12	瓦質土器……………	11	写真26	ジェットヒーターによる石材乾燥……………	20
写真13	青磁・白磁……………	11	写真27	石材樹脂含浸処理……………	20
写真14	染付……………	11	写真28	ソイルセメント吹き付け(南東より)……………	20
			写真29	石材撥水処理(南より)……………	21
			写真30	竣工(北より)……………	21

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯と経過

昭和49年(1974)、宇土城跡¹⁾が所在する独立丘陵(通称:西岡台)に市立鶴城中学校の移転が決定した。記録保存を前提とした発掘調査が行われた結果、古墳時代前期から中期の首長居館を囲むV字溝、宇土城跡の主郭(千畳敷)の空堀跡や溝跡、掘立柱建物跡などの遺構のほか、古墳時代・中世を中心とする多量の遺物が出土した。この成果を受けて遺跡保存の気運が高まり、宇土城跡は史跡公園として保存されることが決定し、中学校移転は中止された。

昭和54年(1979)3月12日に国指定史跡となり、昭和56年度には保存整備の基本計画である「史跡宇土城跡環境整備計画」が策定された。宇土城跡を第1～5ブロックに地区割し、ブロックごとに遺構表示・休憩施設などが計画された。第1ブロック(西岡神社北側地区)は、平成元年度におおむね整備を完了し、つづく第2ブロック(千畳敷及び周辺地区)の整備は、平成元年度より着手しており現在も継続中である。なお、第3～5ブロックは未着手である。

史跡整備を目的として第2ブロックの発掘調査が開始されたのは、平成2年度の4次調査からである。現在までは毎年調査が行われており、千畳敷において多数の掘立柱建物跡(約30棟)が検出されたほか、虎口や門跡などが確認された。また、千畳敷の空堀が未完成であることや、虎口周辺で石塔を用いた城破り跡を確認するなど注目すべき成果が得られている。

保存整備に関しては、平成9年度に学識経験者で構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会が発足し、宇土城跡の調査成果や歴史背景、歴史公園としての位置付けなどを考慮した整備が進められている。本委員会の指導・助言のもとに、10年度には「史跡宇土城跡保存整備基本計画書」が策定され、17年度を完了予定として第2ブロックの調査と整備を進めている。

本書は、これまで実施した発掘調査や整備工事のうち、10次調査で検出し、11・12次調査で追加調査した竪堀状遺構(SD18)と平成14年度の15次発掘調査、および平成13年度保存整備工事の概要をまとめたものである。なお、宇土城跡に関する地理的・歴史的環境については、以下にあげる1から6の調査報告書を参照されたい。

1. 平山修一・高木燕二ほか1977『宇土城跡(西岡台)』本文編、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
2. 井上正・阿蘇品保夫編1977『宇土城跡(西岡台)』史料編、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
3. 木下洋介・元松茂樹1988『宇土城跡(西岡台)』Ⅱ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集
4. 藤本貴仁2000『宇土城跡(西岡台)』Ⅲ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集
5. 藤本貴仁2001『宇土城跡(西岡台)』Ⅳ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集
6. 藤本貴仁2002『宇土城跡(西岡台)』Ⅴ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集

第2節 調査の組織（敬称略，平成14年度）

調査主体 宇土市教育委員会

調査担当 藤本貴仁（文化振興課技師）

調査事務局 高木恭二（文化振興課長），山本和彦（文化振興係主幹），松田安代（同参事），一安隆正（同主事）

史跡宇土城跡保存整備検討委員会

北野隆（委員長，熊本大学工学部），服部英雄（九州大学文学部），千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部），高野茂（熊本県立宇土高等学校）

調査指導・助言及び協力者

本中眞・加藤允彦（文化庁記念物課），木村元浩（熊本県文化課），大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館），鶴嶋俊彦（熊本県人吉市教育委員会），村田修三（大阪大学名誉教授），鶴田倉造・濱口俊夫・根本なつめ・吉田恒・佐藤伸二（宇土市文化財保護審議会），松下修也（宇土市史編纂室）

調査及び整理作業員

木田亘，村山初夫，野添重友，田中國義，木田栄子，村山艶子，橋本チエ子，小畑律子，古山節子，福田フミエ，山田敏江，山形ユキコ，釜賀ヨウ子，白石節子，平木君代，山口陽子，林和美，淵上幸恵，田中由美

註

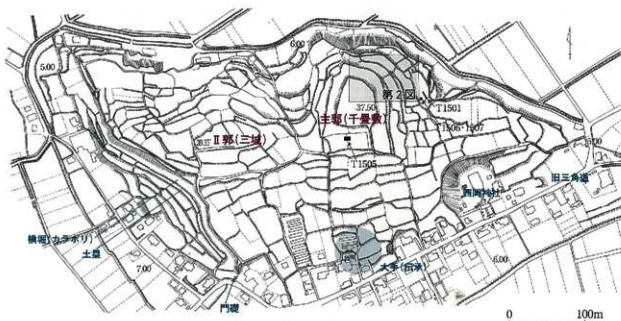
- 1) 宇土には中世と近世の宇土城跡があり，前者を宇土城跡（西岡台），後者を宇土城跡（城山）と呼んで区別している。便宜上，本書では「宇土城跡」とは中世の宇土城跡，つまり「宇土城跡（西岡台）」を指す用語として用いる。

第2章 調査の成果

第1節 調査の概要 (第1・2図)

15次調査は平成14年6月から同年9月にかけて実施した。本調査では、空堀 SD02の調査中に検出した堅堀状遺構 SD19の広がり把握するとともに、その性格についても何らかの手がかり得ることを目的に調査を行った (T1502・1503)。また、千畳敷南側 SD02の約10m外側に位置する溝 (SD04・SD05) が約10mにわたり途切れ、土橋状をなす部分に関して門跡などの遺構の有無を確認するため再調査を行った (T1505)。その理由として、千畳敷の虎口に位置する土橋東側に門跡?と推定される遺構が確認されていることや、西岡台南側の大手 (伝承) と千畳敷とを結ぶライン上に位置することなどから、何らかの構造物が存在した可能性が予測されたためである。しかし調査の結果、数箇のピットを新たに検出したものの、門跡や建物跡などの新たな遺構を確認することはできなかった。そのほか、千畳敷の中心から約90m東のトイレ建設予定地 (平成14年度工事) の平場についても遺構面までの深さなどを確認するためトレンチ調査を行った (T1501・1504・1506・1507)。遺構は確認されなかったが、地表面から基盤層である旧期輝石安山岩までの深さが、最も浅いところで約0.7mであるため、工事によって遺構に影響がないよう約1mの盛土を行った。

なお、中世以外の遺構として、古墳時代前期に掘削されたV字溝 (SD01) をSD19の調査中に検出した。宇土城跡が築城される以前、同地に存在した古墳時代首長居館の規模がほぼ判明するという重要な成果が得られた。千畳敷北側の堅堀状遺構 SD18の調査 (10~12次) でも確認されていることか



第1図 宇土城跡縄張り図 (調査前:昭和49年測量)

ら、以下ではこれらの遺構についてもあわせて報告する。

第2節 検出遺構

SD01（第3・4図、写真9）

古墳時代前・中期に千畳敷部分に存在した首長居館を圍繞する断面V字形の溝である。昭和49・50年の1次調査で確認され、以降6次（千畳敷南東側）・10次（同北西側）・12次（同北側）・14次調査（同南東側）で確認されている。14次調査では、1次調査で検出した方形の張り出し部とほぼ同規模・同形態の張り出し部を新たに1ヶ所確認した。

千畳敷北側では、中世の竪堀状遺構SD18との重複を確認した（第3図）。遺構検出時、SD01埋土とSD18埋土に明確な土色・土質、硬軟の違いを把握できなかったことから、SD01内側壁の急激な落ち

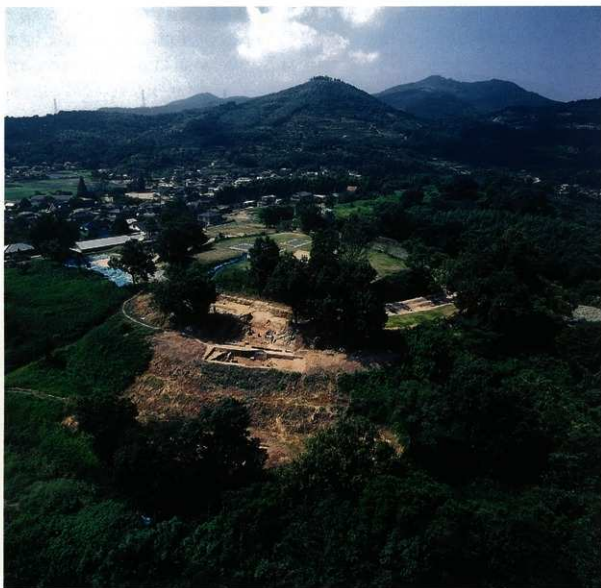
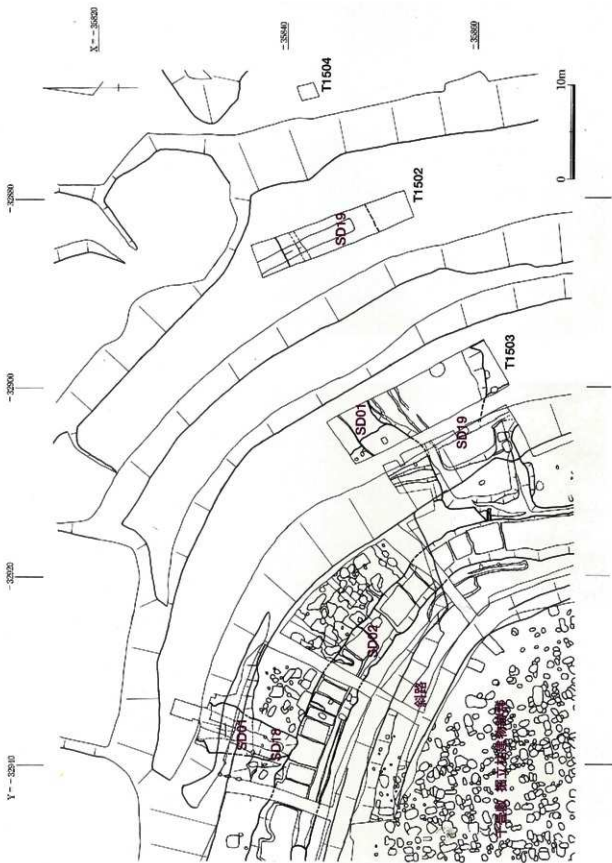


写真1 調査区空中写真（北東より）



第2区 调查区详细配置图



写真2 千畳敷北側空中写真(北より)



写真3 SD18礫群出土状況(北より)



写真4 SD18土層断面(北より)

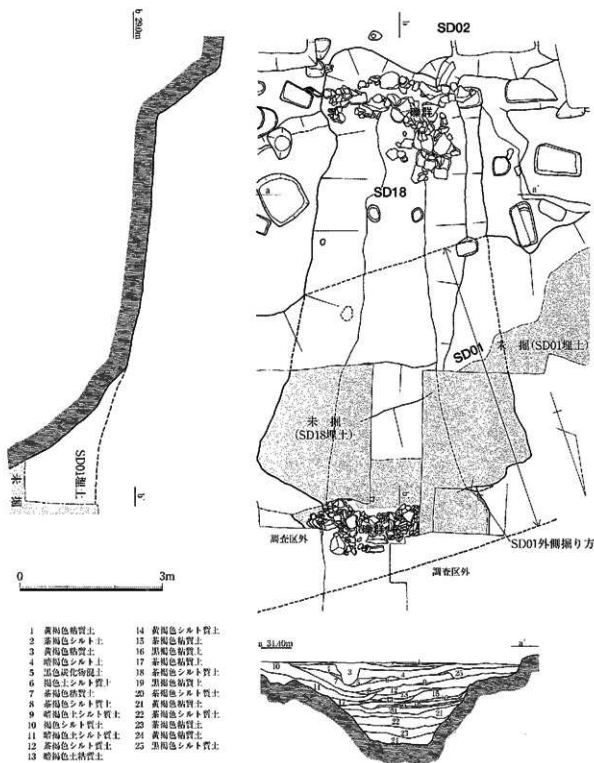
込みをSD18の落ち込みと誤認したが、遺構の形状・傾斜角度や外側の掘り方が確認できたこと、出土遺物などからこの急激な落ち込みはSD01内壁であるとの確証を得た。現状での検出規模は上幅約5mであるが、壁面の傾斜角度やこれまでの調査事例を考慮すると、約6m程度だったものと推定される。傾斜角度は約50°と急峻で、これまでの確認例と同様であり、底面付近から千畳敷の比高差は推定で9m以上とかなりの高低差がある。

千畳敷北東側では、千畳敷から2段下の帯曲輪で確認した(第4図、写真9)。堅堀状遺構SD19と重複しており、SD19の両壁面や底面にSD01の断面が現れたが、調査の目的が城郭整備であるため埋土の掘り下げは行っていない。検出規模は幅約5.3m、底幅約0.3m、深さ約1.7m。底面から千畳敷までの比高差は約9mである。以前の調査でも明らかにされているように、内側(千畳敷側)より外側の方が急勾配であるが、おそらく本遺構が外部からの敵の侵入を遮ることを目的とする防衛的性格を有するためであろう。

SD18(第3図、写真2~4)

南北方向に主軸をもつ堅堀状遺構である。検出規模は上幅3.0~5.8m、底幅0.8~1.9m。SD02外側掘り方付近から北側に向かって約55°の角度で約1mにわたり急激に落ち込むが、その部分より北側はゆるやかに下降し、さらに北側に向かって延びる可能性が高い。この急激に落ち込む範囲を中心として下層から上層にか

けて、大小様々な安山岩の礫が大量に投棄されており、SD02との境界部分には礫が列状にならべられた状態で出土した。そこから約9 m 北側付近にも同様に礫が帯状に広がるが、これは切岸の下端と重なるため SD18埋め戻しの際の根固め石もしくは区画石とみられる。千疊敷の虎口周辺のように五



第3図 SD01・SD18遺構図

輪塔などの石塔残欠は全く確認されていない。埋土は中層から上層にかけて薄い層が連続し、かつ比較的硬質であることから意識的に版築状に突き固められた可能性が高い。SD02との境には排水溝状の掘り込みが存在し、底面や壁面に凹凸があり整形しているとは言い難いが、千畳敷北東側や回東側で検出されているようなSD02の水抜き溝の可能性もある。また、底面にはピットを2つ検出した。位置関係から対になるものと考えられる。ピット間の幅は、約0.7mと狭いため門跡ではないと考えられるが、その性格についてははっきりしない。

SD19 (第4図, 写真5~10)

北東-南西方向に主軸をもつ竪堀状遺構である。14次北調査区からセクションベルトを挟んでT1503を、これより東側約20mにT1502を設定した(第2・4図)。

T1502では、北側の掘り方と下端、底面を確認した。一部でカクラン溝と重複している。SD19がこ

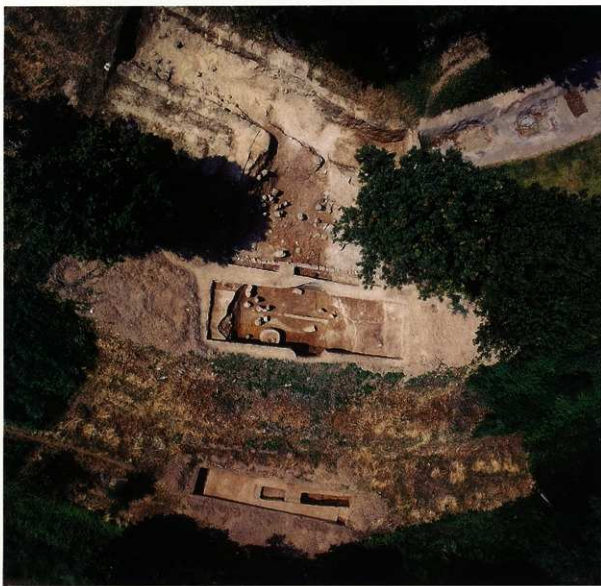


写真5 14次北・15次調査区(T1502・1503)空中写真(北東より)



写真6 T1502カクラン溝に現れたSD19北側壁断面(東より)



写真7 T1503調査前状況(南より)



写真8 SD19検出状況(北より)



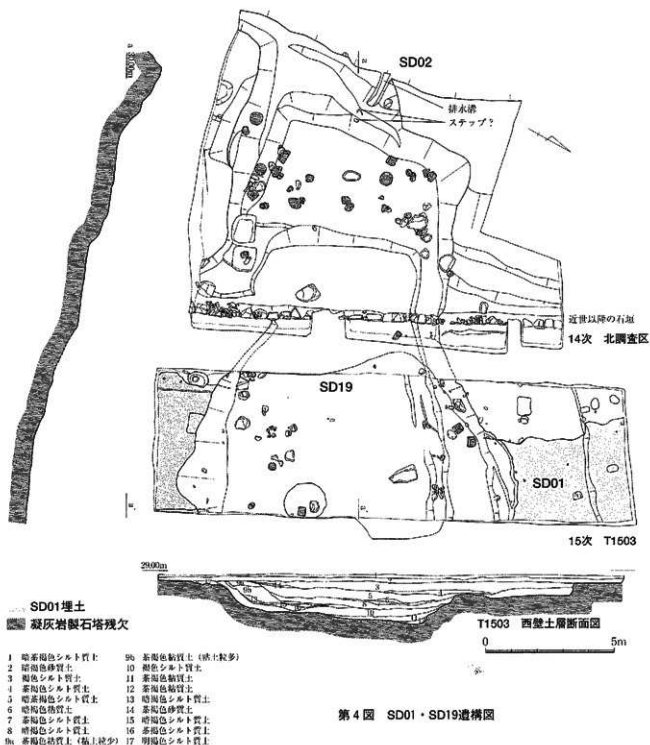
写真9 SD01検出状況(南より)



写真10 SD19調査状況(南より)

の地点まで存在することが確実となったため、遺構保護の観点から埋土の全面的な掘り下げは行わなかった。南側の掘り方は未確認であるが、後述する T1503 の調査所見から規模は幅 10m 前後と推定される。平場面との比高差は約 2.0m であり、底面は南西側から北東側に向けて下降している。

T1503 では、上幅 5.4~13.4m、底幅 6.1~8.1m、平場面との最大比高差 2.5m、主軸の傾斜角度約 17°、壁面の傾斜角度 35°~40° である。上面幅および底面幅は北東側ほど幅広になる。14 次調査と同様に下層から石塔残欠が出土したが、SD02 に近い部分より数は少ない。出土層位から同時期に投棄さ



第4図 SD01・SD19遺構図



写真11 土師器



写真12 瓦質土器

れた可能性が高い。北側には幅約2.6～4.4mの帯曲輪状の平坦面がある。前述のとおりSD01とは重複関係にある。なお、SD02とは埋土の埋積状況から時期差が認められず、同時期に廃絶したと考えられる。



写真13 青磁・白磁

第3節 出土遺物

土器・陶磁器 (写真11～15)

出土遺物の大半は、中世の土師器や瓦質土器などの在地の土器や、青磁や染付などの貿易陶磁器であるが、古墳時代の土師器・須恵器や近世以降の陶磁器なども少量ながら出土した。

土師器の皿・坏は、そのほとんどが糸切り底で指頭圧痕が残るものもある。ヘラ切りのものは全くといってよいほど確認できない。中世の遺物の大半が土師器といえるほど、出土遺物に占める土師器の割合は大きい。このことは各地の中世城跡調査においても同様の傾向が指摘されている。瓦質土器は火鉢や摺鉢などがある。火鉢は深鉢がほとんどで、口縁部外面にスタンプが施されており、内面に煤が付着しているものがある。

貿易陶磁器として青磁、白磁、染付などがある。青磁は龍泉窯系がほとんどであり、ごく一部に同安窯系のもが含まれる。染付は漳州窯



写真14 染付



写真15 黒釉陶器

系とみられる粗製の柴付がわずかに出土している程度で、景徳鎮窯系のものが多数を占める。これら貿易陶磁器の時期は13世紀後半～16世紀末までと比較的年代幅があるが、15世紀中頃～16世紀後半が中心である。

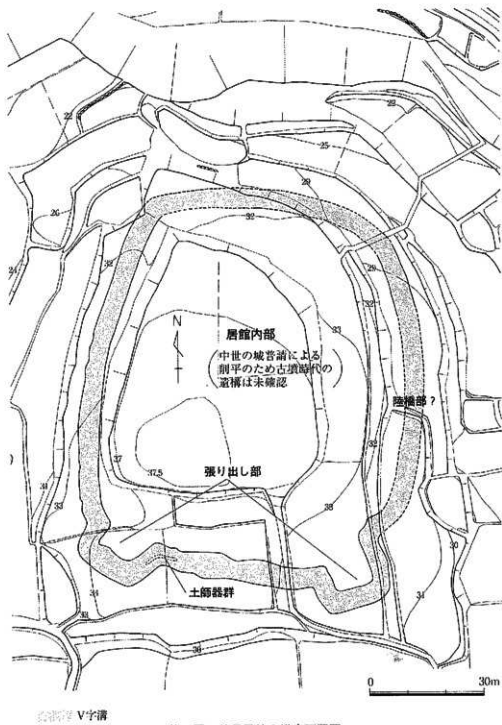
石 塔

五輪塔の風空輪・火輪などがあり、石塔の形式から14世紀代のものとみられる。宇土城跡から出土する石塔の多くがこの時期のものであり、宇土城の縄張りが形成される以前、千疊敷周辺に墓地が存在した可能性が高い。

第3章 ま と め

第1節 古墳時代の首長居館について

15次調査において、千疊敷部分に存在した古墳時代首長居館の規模をほぼ特定することができた成



第5図 首長居館の推定配置図

果は大きい。これまでの調査結果を総合すると、急峻な断面V字の溝に囲まれた南西側と南東側の計2ヶ所に張り出し部をもつ不整楕円形プランで、V字溝の検出状況や地形などを考慮すると、居館東側に陸橋部が存在するものと推定される¹⁾(第5図)。溝に囲まれた居館部分の大きさは、東西幅約80m、南北幅約93mであり、面積は約6600m²、溝を含めると約8400m²を測り、九州で確認されている約20例のうち、面積では2番目に大きい²⁾。

宇土半島基部は、西九州のなかでも前期の前方後円墳が数多く築造された地域として広く知られており、西岡台の半径2km圏内には城ノ越古墳、迫ノ上古墳、スリバチ山古墳、天神山古墳などの前方後円墳や猫ノ城古墳・神合古墳などの円墳が存在する。西岡台の首長居館はこれらの前方後円墳や円墳に葬られた首長層の生活の場であり、それを裏付けるようにV字溝から壺・甕・鉢・器台・高坏などの生活遺構に関連する土器器が多量に出土している。武末純一氏によると、出土した土器器は1期(庄内式新段階から布留式最古段階、3世紀末から4世紀前半)、2期(布留式古・中段階、4世紀中頃から後半)、3期(布留式最新段階から初期須恵器の時期、4世紀末から5世紀中頃)に分けられ、このうち2期が最も出土量が多く、次いで1期となり、3期が最も少ないという(高木・武末2001)。つまり、1首長=1居館ではなく、数代にわたり継続的に営まれた可能性が高い³⁾。居館と対応するとみられる先にあげた前期の前方後円墳は、肥後はもとより西九州を代表する首長墓系譜である。当時、宇土半島基部が肥後の政治的中心地であり、そのような地域において生活の場である居館と、奥津城である古墳の比較検討ができることの意義は計り知れない。

なお、一般成員の生活の場は、居館から東へ約300mの宇土城跡(城山)がある低丘陵上に所在する宇土城跡城山遺跡や、西へ約500mの藁遺跡などがその候補地にあげられる(高木・武末2001)。特に城山遺跡は宇土半島基部における弥生・古墳時代の拠点集落と考えられ、ほぼ全ての時期の遺物が出土しているが、主たる時期は弥生時代前期と同後期後半から終末期、古墳時代前期と考えられる(原田2002、杉井2002)。古墳時代中期以降の遺物はほとんどみられないという特色があり、西岡台の首長居館と消長をともにする可能性がある。寺沢薫氏によると首長居館の成立は、原則として環壕集落を解体させるというすぐれた階級的な事態によって、各地の古墳時代の幕開けと一体となる出来事であったという(寺沢1998a・b)。つまり、首長居館は共同体間階級分化の一環の進行によって出現したものであり、一般成員からの政治的な空間的独立性や隔絶性がそこに表出されているといえよう。この理解に従えば、杉井健氏の想定のように古墳時代の始まり頃、城山遺跡の集落から独立するかたちで西岡台に首長居館が成立したと考えられ、城山遺跡は一般成員の集落として継続したと考えられる(杉井2002)。

第2節 豎堀状遺構 SD19について

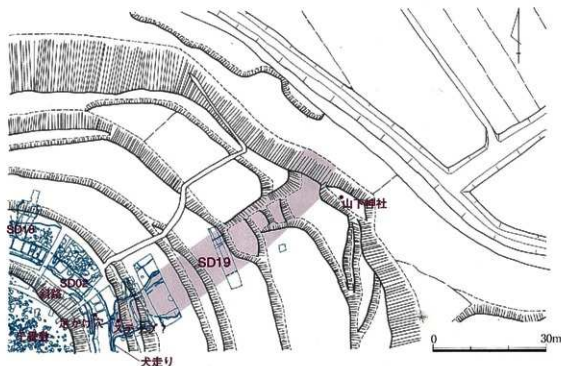
14次調査に引き続いて行った豎堀状遺構 SD19の調査によって、当初想定していた遺構の規模をはるかに越えることが判明した。調査以前の地形や、自然堆積で埋まるほど小規模ではないことから、廃城に伴う時期か、その後何らかの理由で人為的に埋められたと考えられる。

遺構の規模を確定させるためには、さらに東側に調査区を広げる必要があるが、現況の地表面の観

察から、さらに東に延びて眼下の平野面まで到達する可能性が極めて高い。その根拠として、T1502の北東方向に山下神社の北側を横切る大規模な堅堀状の落ち込みが丘陵裾部まで確認できるからである（第6図）。つまり、本遺構は千畳敷の空堀SD02が所在する帯曲輪から丘陵裾部の約80mにわたり存在することがほぼ確実となった。

懸案となっていた遺構の性格については、遺構の形状から一般的な堅堀とはやや異なるといえるが、千畳敷北側の急傾斜地と同東側の緩傾斜の境、すなわち地形の境界に位置する点を重視すれば、斜面を回り込んでくる敵を効果的に防ぐために配置された大規模な堅堀と考えることができる⁴⁾。掘削年代は不明であるが、宇土城跡における最終段階の普請と想定されるSD02と並存し、同時期に廃絶しており、足掛けとみられるステップやSD19とSD02が交差する部分（SD02外縁）に犬走り状のスロープが存在する（藤本2000・2002）ことを重視すれば、堅堀を兼ねた通路だったのではなかろうか。推測の域をでないが、SD02掘削以前に存在した堅堀をSD02掘削段階に改変したとも考えることができる⁴⁾。そのようにみていくと、掘手に通じる道ではないかと以前から推定されていた千畳敷北側の斜路との有機的なつながりを想定することができる。つまり、これまで確認されていなかった千畳敷における掘手の候補にあげることができよう。

ところで、SD19では石塔残欠が比較的多く出土しているが、こども千畳敷の虎口周辺と同様に石塔を用いた城破りの対象地だったと推定される。千畳敷南側でも石塔が大量に出土している地点があるが（平山・高木ほか1977）、この地点のすぐ南には溝の一部が切れて土橋状の掘り残しがあり、大手（伝承）から千畳敷に向かうためには必ず通らなければならない場所である。このことから、石塔が



第6図 SD19推定配置図（昭和49年測量図と合成）

出土する場所は、千畳敷周辺でもごく限られており、いずれも出入口もしくは通路の要所だった可能性が高いことは城跡の意味を考えるうえで注目すべき点であろう。

註

- 1) 西岡台では未検出だが、大分県小迫辻原遺跡2号環壕の4ヶ所の張り出し部のうち、南西側のものには2つの柱穴が斜めに掘られており、出入口用の橋脚の存在が指摘されている(土居1996)。
- 2) 九州では福岡市比恵遺跡4号環壕(古墳時代前期)の約8000㎡が最大だが、ごく一部が確認されただけで不明瞭である。また、福岡県八女市南中学校校庭遺跡・酒ノ上遺跡の遺構を100m以上の居館とする説もあるが詳細は不明である(久住1998)。
- 3) 高木恭二氏は、西岡台1期に城ノ麓古墳、2期に迫ノ上古墳・スリバチ山古墳、3期に神合古墳・猫ノ城古墳がそれぞれ対応すると考え、天神山古墳は居館から見えないことから除外している(高木・武末2001)。一方、武末純氏は、4世紀後半の有田IA期(西岡台2期に対応)を中心として、スリバチ山古墳・迫ノ上古墳・城ノ麓古墳ともほぼ同時期とし、天神山古墳がやや後出するとみる(武末2000)。
- 4) 鶴嶋俊彦氏(熊本県人吉市教育委員会)のご教示による。
- 5) SD19がSDX2掘削以前に存在した根拠として、SD19を避けるようにSD02が千畳敷側にごくわずかであるが、ゆるやかに内側に入り込むことや、SD02掘削時に伴う排水溝によってSD19と連結していることなどがあげられる。

引用・参考文献

- 平山修一・高木恭二ほか1977 『宇土城跡(西岡台)』本文編、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 土居和幸1996 「大分県小迫辻原遺跡の調査」『4・5世紀の日韓考古学』九州考古学会・嶺南考古学会
- 寺沢 薫1986a 「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 寺沢 薫1986b 「古墳時代の首長居館」『古代学研究』第141号、古代学研究会
- 久住猛雄1998 「九州における首長居館の成立と展開」『古墳時代の家族居館をめぐる諸問題』第8回東日本埋蔵文化財研究会
- 武末純—2000 「日本古墳時代首長居館宅をめぐる二・三の問題—九州の事例から—」『韓国古代文化の変遷と交渉』
- 藤本貴仁2000 『宇土城跡(西岡台)』Ⅲ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 高木恭二・武末純—2001 「西岡台遺跡」『考古』新宇土市史基礎資料第9集、宇土市教育委員会
- 杉井 健2002 『宇土城跡城山遺跡』『新宇土市史』資料編第2巻、宇土市
- 原田範昭2002 『宇土城跡城山遺跡』『新宇土市史』資料編第2巻、宇土市
- 藤本貴仁2002 『宇土城跡(西岡台)』V、宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集

第4章 保存整備工事

第1節 はじめに

宇土城跡保存修理事業は、『史跡宇土城跡環境整備計画』（昭和56年度策定）と『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』（平成10年度策定）を基本計画として、文化庁および県教育委員会の指導のもと、史跡宇土城跡保存整備検討委員会の協議を経て、発掘調査ならびに遺構表示施設や便益施設などの整備工事を継続的に行っている。

整備対象地区の第1から第5ブロックのうち、第1ブロック（西岡神社北側地区）はすでに整備を完了しており、現在整備中の第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）は平成元年度より着手した。その

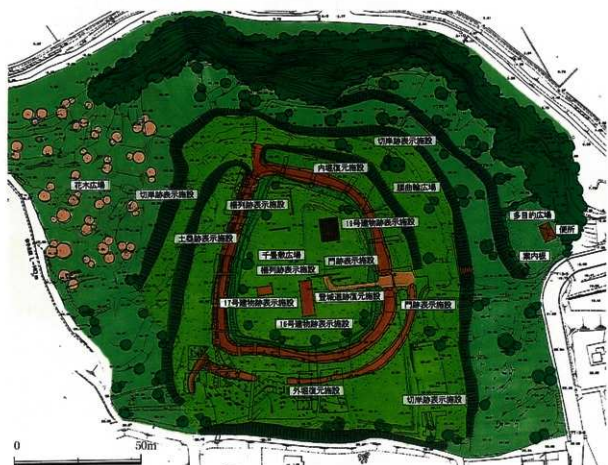


写真16 千畳敷周辺整備状況（南西より）

後、大雨による地滑り災害などの予期せぬ事態が発生したため、城郭遺構の整備に直接関係しない防災工事に数年を費やした。このことから、事業計画が当初予定よりも遅れ、第2ブロックの遺構整備を着手したのは空堀（SD02）の整備を開始した平成9年度からである。翌10年度も空堀跡の整備と11年度以降本格化する千畳敷遺構整備に伴う保護盛土、11・12年度は千畳敷の掘立柱建物跡16・17・19号建物の整備を行った（藤本2001・2002）。

以下では、13年度に行った整備工事の概要を報告する。事業の組織は次のとおり。

13年度事業組織	事業主体	宇土市
	主幹課	宇土市教育委員会文化振興課
	設計・監理	㈱空間文化開発機構
	工事施工	㈱グリーン工業、㈱山陽技研
	工事検査	宇土市役所工事検査室
	指導・助言	文化庁文化財保護部記念物課 熊本県教育委員会文化課 史跡宇土城跡保存整備検討委員会



第7図 千畳敷及び周辺地区保存整備計画図

第2節 平成13年度整備工事

本年度は大きく分けて3地区の整備工事を実施した(第8図)。**①千畳敷北側空堀周辺**(第9・10図, 写真17~21), **②千畳敷東側を中心とする地区**(写真22~24), **③千畳敷南東側空堀の城破りに伴い大量に石塔が投げ込まれた範囲とその周辺**(第11・12図, 写真25~30)である。

千畳敷の空堀については,平成9・10年度に千畳敷南側から西側部分にかけて整備を実施しており,13年度工事分をあわせて全体の約2/3が終了した。残りの区間においても15年度に整備を完了する予定である。

千畳敷北側空堀では,掘削に伴う工区単位や作業工程を示すと推定される堀底の凹凸跡(小間割),堀壁外側から張り出した突出部を忠実に表現するために,できる限り保護盛土の厚さを均一にするよう努めたが,後述する雨水排水の関係で凹部の盛土を厚くした部分もある。この工程の後,従来の工法と同様に盛土上面にラスを張り,ソイルセメントで吹きつけを行なった。ソイルセメントは赤・茶・黒色などを混ぜた顔料の混合率をランダムに変化させることによって,素掘りの堀の雰囲気を再現するよう工夫した。雨水処理については,緩やかな傾斜を保ちながら北西側の開渠部分から排水する千畳敷南側や西側と異なり,北側は堀底に凹凸があるため排水方法が問題となった。検討の結果,凹部に雨水が溜まる解消策として,凸部の盛土部分に配水管を通すことで対応したが,遺構レベルとの関係から約10cm程度溜水する部分があることや,ヘドロや落ち葉の除去など定期的な維持・管理が必要である。その他,千畳敷側の切岸部分にはコグマザサを植栽し,平場部分には張芝を行った。

千畳敷東側を中心とする地区では,19号建物跡西側の橋列跡(2基),16・17・19号建物跡の解



写真17 千畳敷北側工区整備前 (東より)



写真18 遺構保護盛土 (北西より)



写真19 ラス張り付け状況 (西より)



写真20 ソイルセメント吹き付け (東より)



写真21 竣工（東より）



写真22 千疊敷地区野芝張り（北東より）



写真23 横列跡整備状況（南東より）



写真24 解説板設置状況（西より）



写真25 千疊敷南東側工区整備前（北より）



写真26 ジェットヒーターによる石材乾燥



写真27 石材樹脂含浸処理



写真28 ソイルセメント吹き付け（南東より）

説板（3基）、張芝・低木植栽、暗渠排水、給水・給電工事などを行った。

千畳敷南東側空堀の整備についても、千畳敷北側と同様の工法を採用した。また、石塔を露出展示するために石材を強化（樹脂含浸処理）する必要があるため、石塔を取り上げてジェットヒーターで強制乾燥させた後、溶剤に浸けて石材を強化した。その後、出土位置に再配置し、ソイルセメント吹きつけと石塔の撥水処理を施した。取り上げた石塔は、石材の乾燥・含浸処理の工程と並行して実測図作成と写真撮影を行った。また、同地点の千畳敷側切岸および平場部分には張芝を行った。

引用・参考文献

藤本貴仁2001 『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集

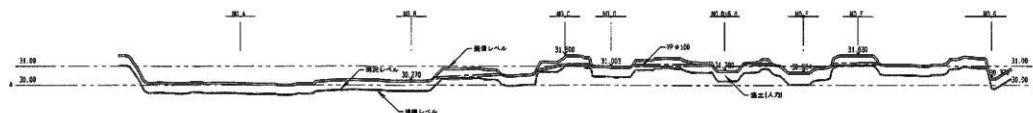
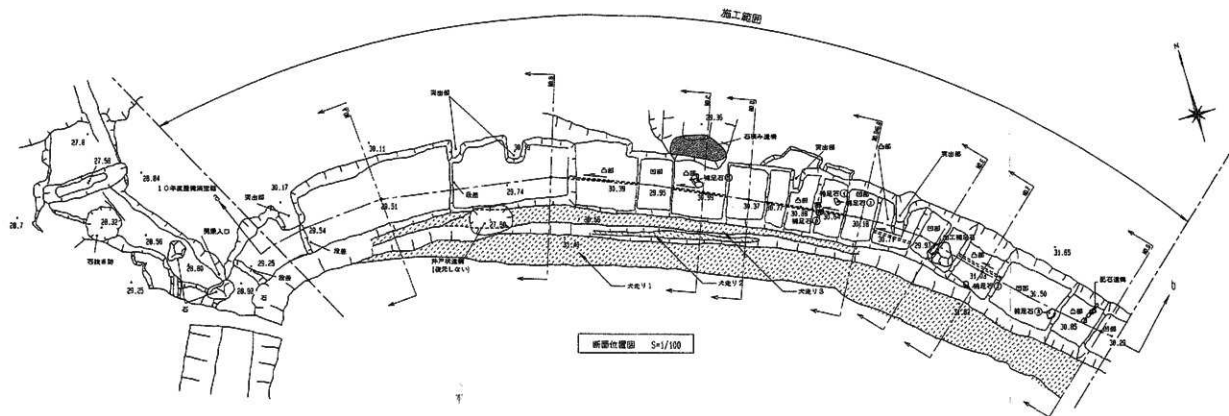
藤本貴仁2002 『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集



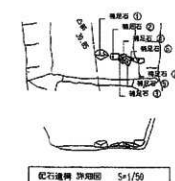
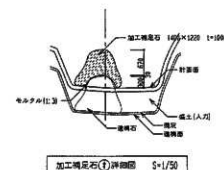
写真29 石材撥水処理（南より）



写真30 竣工（北より）



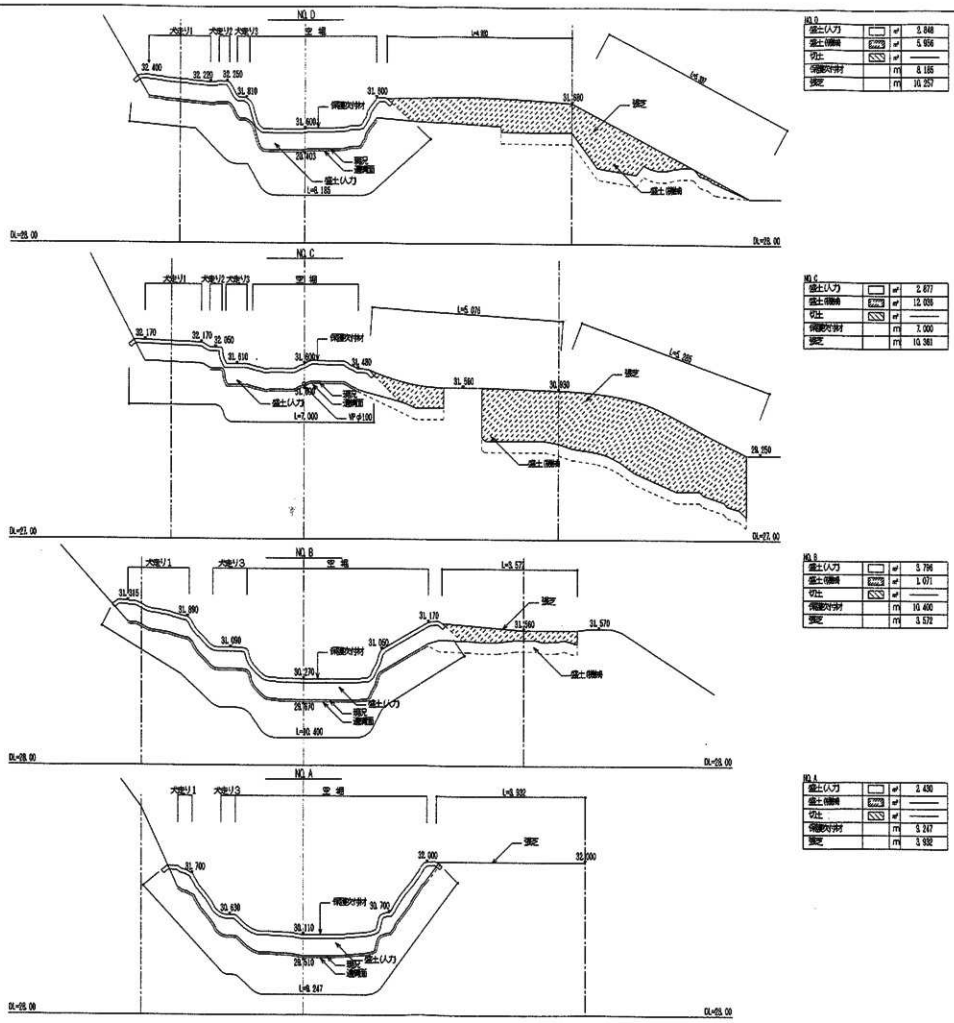
基号	名称	数量	单位	备注
10000	碎砖	1000	m ³	
10001	基础石	1	座	灰土墙
10002	基础石	1	座	灰土墙
10003	基础石	1	座	灰土墙
10004	基础石	1	座	灰土墙
10005	基础石	1	座	灰土墙
10006	基础石	1	座	灰土墙
10007	基础石	1	座	灰土墙
10008	基础石	1	座	灰土墙
10009	基础石	1	座	灰土墙
10010	基础石	1	座	灰土墙
10011	基础石	1	座	灰土墙
10012	基础石	1	座	灰土墙
10013	基础石	1	座	灰土墙
10014	基础石	1	座	灰土墙
10015	基础石	1	座	灰土墙
10016	基础石	1	座	灰土墙
10017	基础石	1	座	灰土墙
10018	基础石	1	座	灰土墙
10019	基础石	1	座	灰土墙
10020	基础石	1	座	灰土墙



基号	名称	数量	单位	备注
10001	基础石	1	座	灰土墙
10002	基础石	1	座	灰土墙
10003	基础石	1	座	灰土墙
10004	基础石	1	座	灰土墙
10005	基础石	1	座	灰土墙
10006	基础石	1	座	灰土墙
10007	基础石	1	座	灰土墙
10008	基础石	1	座	灰土墙
10009	基础石	1	座	灰土墙
10010	基础石	1	座	灰土墙
10011	基础石	1	座	灰土墙
10012	基础石	1	座	灰土墙
10013	基础石	1	座	灰土墙
10014	基础石	1	座	灰土墙
10015	基础石	1	座	灰土墙
10016	基础石	1	座	灰土墙
10017	基础石	1	座	灰土墙
10018	基础石	1	座	灰土墙
10019	基础石	1	座	灰土墙
10020	基础石	1	座	灰土墙

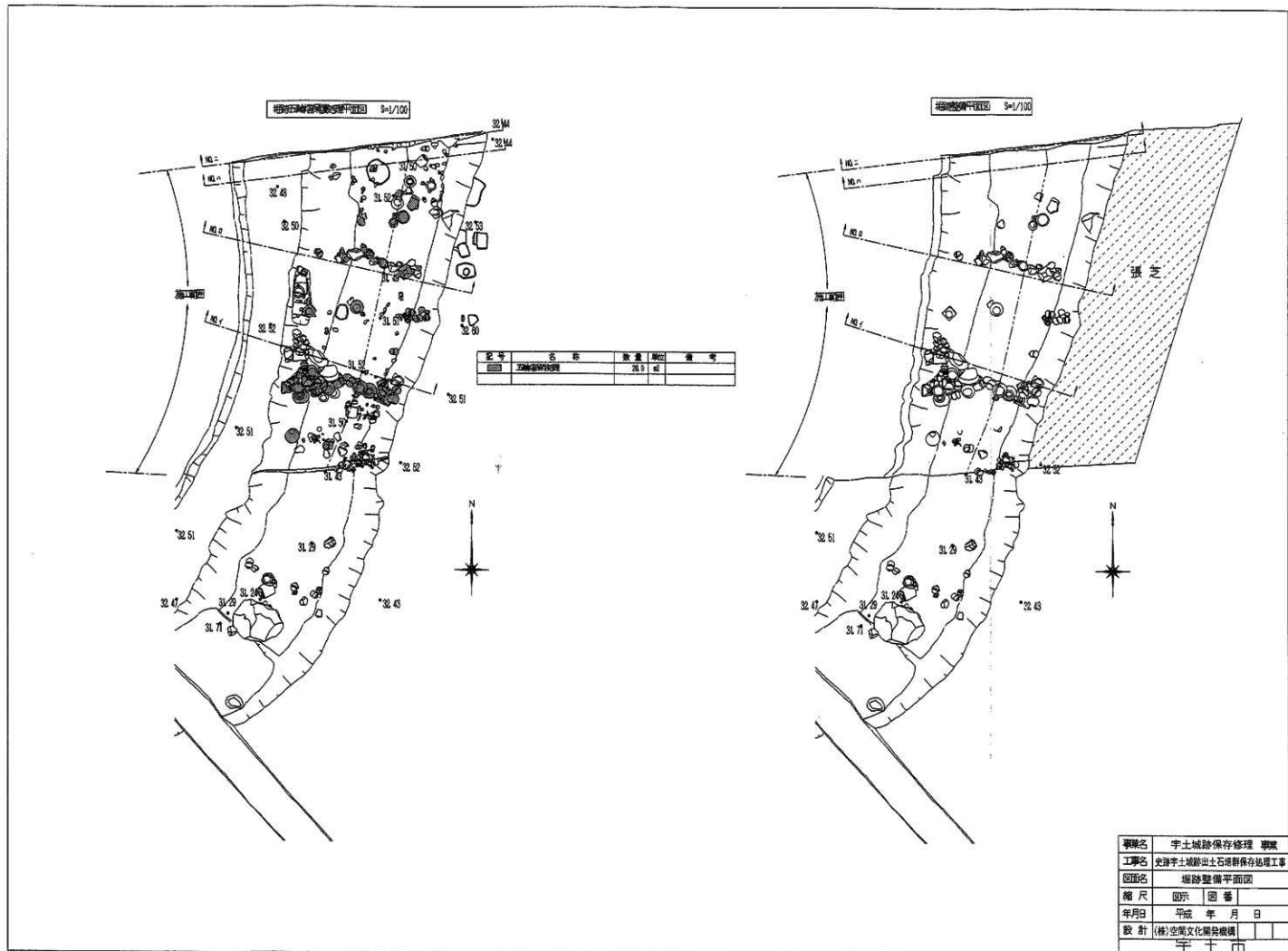
專案名	平土城附存塔	專載
工程名	平成13年度支那平土城附存塔工事	
圖名	塔附存塔	
圖尺	原寸	縮小
年月日	平成 年 月 日	
設計	佐野隆文化開発機構	
	宇 土 市	

第9圖 千疊敷北側空堀周辺施工圖(1)

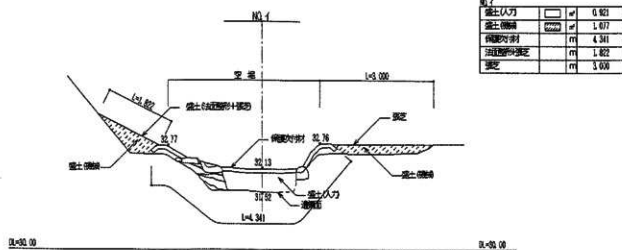
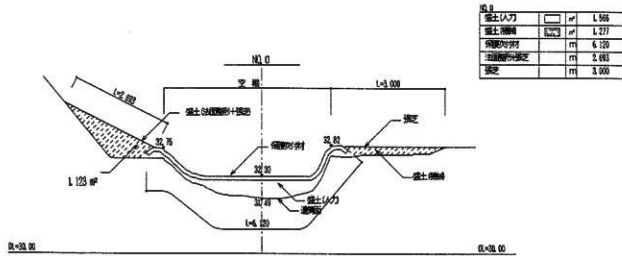
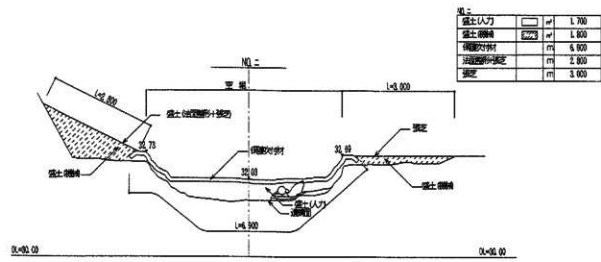
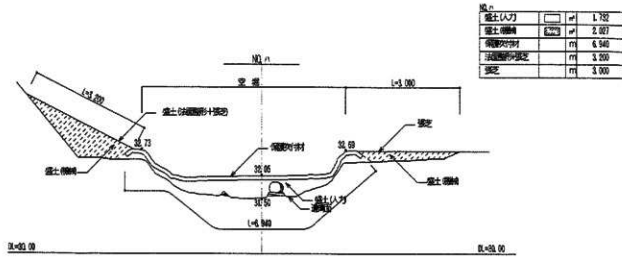


事業名	宇土城跡保存修理 築城
工務名	平成13年度史跡宇土城跡保存整備工事
図面名	空堀復元横断面
縮尺	1:100 図番
年月日	平成 年 月 日
設計	柳空間文化開発機構
宇 土 町	

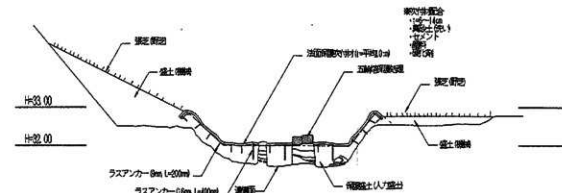
第10図 千鳥敷北側空堀周辺施工図(2)



第11図 千景教南東側空堀周辺施工図(1)



法面保護詳細図 S=1/400



事業名	宇土城跡保存修理 事業
工事名	史跡宇土城跡出土石塚群保存地埋工事
図面名	施設詳細図(法面保護・横断面)
縮尺	図示 図番
年月日	平成 年 月 日
設計	(株)空間文化開発機構
	宇土市

報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと (にしおかだい)							
書名	宇土城跡 (西岡台) VI							
副書名	発掘調査・保存整備事業概報							
シリーズ名	宇土市風蔵文化財調査報告書							
シリーズ号	第24集							
執筆者名	藤本貴仁							
編集機関	宇土市教育委員会							
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査回数	調査面積	調査原因
		市町村 番号	遺跡 番号					
うとじょうあと 宇土城跡	うとじょうあとの 宇土市神馬 町字千畳敷	43211		32° 40' 34"	130° 38' 54"	10~12次, 15次	448㎡	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宇土城跡	中世城	古墳 中世	溝跡(古墳時代) 竪堀状遺構(中世)	土師器・瓦質土器・ 青磁・染付・白磁な どの土器・陶磁器、 石塔		古墳時代首長居館の規模 をほぼ確定。指手の可能 性がある竪堀状遺構。		

宇土城跡（西岡台）Ⅵ

—発掘調査・保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第24集

発行年月日 2003年3月31日

編集・発行 熊本県宇土市教育委員会
〒869-0433 宇土市新小路町95
TEL 0964-22-6500

印刷 シモグ印刷株式会社
〒869-0511 下益城郡松橋町曲野2437-1
TEL 0964-32-3131

